
ハヤテのごとく！最後の１日

dandy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！最後の1日

【Nコード】

N1121K

【作者名】

dandy

【あらすじ】

桂ヒナギクの誕生日にあやかりました。

（前書き）

3月3日はひな祭り。無論言わずもがなヒナギクさんの誕生日です。だからといってはなんです。がちょっとした短編小説を書いてみました。

ただ…「恋」とは難しいものですね。なんか半端になっちゃいました。4日かけたわりにはよく書けた方だとは思いますが。

まあこれくらいが丁度いいと思います。長すぎ短すぎ。ちょっと「ナイトメアパラダイス」の流れを継承してますが気に入らず。最初に言います。ネタがなかったのでパクリました。いい意味で。

12月31日。俗に言う大晦日である。高校生は冬休み。なのだが、ここ白皇学院の生徒会はそうもいかない。桂ヒナギク以下数名が時計塔の生徒会室に集まっていたのだ。

「…じゃあ、これでおしまい。みんな、今年一年お疲れさま」

「うん。お疲れ」

「いやゝ。まったくもってそのとおり！」

いるのはヒナギクに花菱美希、朝風理沙。

「しかし愛歌さんは欠席ですか…。珍しいですね」

春風千桜。

「愛歌さんは年末は海外で過ごすらしいわ。それを言うなら泉は？連絡きてないけど…」

「…え？あ…えと…」

「た、たぶん泉は忘れてるんじゃないか！？でもいいじゃないか！もう仕事も終わったことだし—」

なんとかして理沙は泉の話題から離れさせようとするが生徒会長であるヒナギクはそれを許さない。

「ダメよ。許可なく休むのは。それに今年最後の生徒会くらいみんな一緒に終わらせましょう」

「だ、だったら愛歌さんだって…」

「なに？理沙は泉が来るとなにか都合が悪いの？」

痛いところを突かれ理沙はついに黙る。ヒナギクは泉を呼ぶために携帯電話を取り出した。

三千院家でも新年に向けた準備が着々と進んでいた。ハヤテはいつも以上に力を入れ清掃にあたっていた。

「〜」

鼻歌混じりにどんと掃除していく。そしていよいよ残り1部屋。ナギの部屋だ。

（よし！ここが終わったらマリアさんの手伝いに時間を割けるぞ）
気合い十分でハヤテは扉を開いた。そこで見たのは今まさに着替えの最中のナギであった。着替え中と言ってもすでに昼は過ぎている。着替えを見られナギは身体中恥ずかしくて赤くなる。

「ハ、ハヤテ！？」

「あ、おはようございますお嬢さま。今からお掃除致しますのでち

よつと失礼して…あれ？」

黒い邪気が部屋中を覆う。出所は間違いなくナギだ。

「…ちよつと失礼だと？ちよつとで済むと思っているのか…！？」

「え？でも床と窓を磨いたら終わりますし…」

「そういう問題ではない！！ハヤテの…ハヤテのドアホー…ッ！
！！！！」

「ええ！？」

花瓶やら皿やらいろんなものを投げられ、ハヤテは部屋を追い出される。しかしナギの怒りはこんなことでは収まらない。

「お、お嬢さま！？」

「もう知らん！！どっかに行ってる！！当分ハヤテの顔など見たくもないからどっかに行ってるーっ！！」

「い……………」

突然怒鳴られハヤテは頭の中が真っ白に。仕方なくハヤテは屋敷を出た。動揺していたためか財布（たいした額ではない）も携帯電話も持たず手ぶらで凍える街に放り出されてしまったのだ。

（追い出されてしまった…。どうしよう…。今度こそ…本当に嫌われたな。でも一体どうして…）

相変わらず心が読めないハヤテは街を歩きながら悩む。冷たい風にあたりながら行くあてもないので人目の少ない公園に落ち着いた。

（怒られて追い出されたなんて…知り合いに知られたらなんか恥ずかしいなあ…。誰にも知られずほとぼりが冷めるまでここに…）

そう思っていたハヤテだったがそうもいかない。ベンチに座っていたハヤテの後ろから突如顔が覗き込まれる。

「あれ？ やっぱりハヤ太君だ」

「…瀬川さん！ どわっ！！」

急に泉が現れたことでハヤテは驚きベンチから転げ落ちた。泉も軽い気持ちで声をかけたつもりが予想外の反応をされたため双方が驚いた。

「ハヤ太君！！ 大丈夫？ ！」

「あたたた…。ええ… なんとか。びつくりはしましたけど。でもどうして瀬川さんがここに…？」

「それはこつちも同じだよ」 なんてこんな寒いのに公園に？」

「え、えっと…」

本心は言いたくないハヤテだったが嘘もつきたくない。

「僕のことはいいです。それより瀬川さんは…」

「…もしかしてハヤ太君、私にそんなに興味があるの？」

「あ…それはその…」

「でもハヤ太君には話してあげるよ」 たいしたことじゃないんだけど」

泉は裏から回り込みベンチに座るとハヤテも泉の隣に座った。

「実は屋敷の大掃除をやってるから終わるまで暇だし… ハヤ太君は暇？」

「まあ暇というか無期限の暇をいただいた感じで…」

「あゝだつたら一緒にどこかに遊びに行こうよゝね？一年で最後の日くらいパーツと…」

ピリリ…♪

突然泉の携帯電話が鳴る。

（もー！こんな時に誰なのよー！）

「あ、ごめんねハヤ太君。ちよつといい？」

「はい。僕は構いませんよ」

そして泉はかけてきた人物を知りちよつと意外に感じた。

（…ヒナちゃん？なんだろ…）

しばらく電話に出続けた果てに携帯電話を切ると申し訳なさそうにハヤテに謝る。

「あの…ハヤ太君。暇って聞いたのに悪いけどちよつと用事ができちゃって…」

「用事ですか？じゃあ僕もこれで」

そしてハヤテもいつまでもここにはいられないと思い屋敷に帰りナギに謝ろうかと立ち上がる。だがまだ泉の話は終わっていないかった。

「あ！待ってよハヤ太君。ここからが本題…」

急に泉はしゅんとしてしまつ。どうやら電話の内容がそうさせたようだ。

「あの…なんかヒナちゃんが怒ってるみたいなんだ…。なんでかよくわからないけど…とりあえず今からすぐ白皇学院に行かなきゃいけないんだ」

「そうですか」

「だからその…一緒に来てほしいんだけど…一緒に来て謝って…！」

泣きべそをかきながらハヤテにすがり付く。さすがに1人だけヒナギクに怒られるのは勘弁だと思ったからだ。しかもなんの言われもないことで怒られるのはさらに御免なのだ。要はヒナギクの怒りを泉とハヤテで二分しようという考えだ。

「いいですよ。しばらくは暇ですし」

「でもどうしてハヤ太君は暇なの？」

「あ…気になります？」

「私も話したんだしハヤ太君も話してくれなきゃ」

気になったことはとことん追及したい泉。なかなか引き下がらない泉を見たハヤテは仕方なく嘘をつくことに。

「あつと…1年で最後の日ぐらいゆっくりしてこいとマリアさんに言われまして…」

「ふーん。そつか。じゃあ大丈夫だね♪ささ、一緒に怒られに行こうよ♪」

「あ…やっぱりそのために僕と一緒に行くんですか」

「まあ…ほかにもあるんだけど…」

「でもここから白皇学院まではちよつと距離がありますけど…急ぎます？」

「ほえ？急に越したことはないけど」

「じゃあ…飛ばしますよ！」

ハヤテは泉を抱え宙を舞う。いきなり抱えられ泉はかなり驚いた。

「え！？なにになにハヤ太君！？」

「急ぐのならばこうしたほうが早いですよ。大晦日ですから道路は混んでますしこっやって飛んだ方が早いですって」

ぱつぱつと屋根から屋根をつたい白皇学院を目指していく。しかしさすがにハヤテは大丈夫にしても泉が我慢できなかったようだ。

「ハヤ太君…ちょっと怖いよ…！」

「そうですか？だったら下に降りるしかないですね。ちょっと遅くなりますけど」

歩道に降り飛ぶのを諦め全力で走る。すると前には見慣れた顔が見えてきた。

「はぐはぐ…。せつかくの大晦日なのにたいして変わらないなんて…。なにかいいことないかな？」

肉まんを食べながら歩はぶらぶらしていた。歩も大晦日だからといっていることもなく暇なのだ。つまらなそうに歩いているとようやく前からハヤテが来るのが見えた。一気に表情が明るくなる。

「あ！ハヤテくん！あの…」

歩が声をかけようとするもハヤテは目もくれずに走って行ってしまった。あまりに一瞬の出来事に歩は持っていた肉まんを落としてしまった。

「ハヤテ君…よね？執事服も着てたし…それより…」

歩は一瞬だけだがハヤテが人を抱えていたのが見えたのだ。まさか
と思ったがなにか引つ掛かった。

「もしかして誘拐！？まさかね…。いやでも…」

歩は万が一のことを考えハヤテに真相を確かめることに。携帯電話
を取り出しハヤテに電話をかけたのだった。

ハヤテは泉を抱えたまま白皇学院に到着。幸い誰にも見られずに中
に入ることができた。

「ありがとうハヤ太君」もうちょっと…付き合ってくれよね？」

「まあここまで来てしまったからには最後まで付き合いますよ」

「本当に！？良かった」

「なにが良かったんだ？」

いきなり声が出たのでハヤテも泉もびっくり。校舎のほうからやつ
て来たのは生徒会の会合帰りの千桜だ。あきれたようでもあり驚い

たような表情をしていた。

「泉。ヒナが待ってるぞ」

「…怒ってる？」

「無断で休んだから…まあそれなりに。にしてもなぜ綾崎君が一緒なんだ？」

千桜はハヤテに聞く。

「まあ成り行きで」

「まあいい。それより…また三千院のところに行ってもいいか？」

「はい。待ってますよ。千桜さん」

「…じゃあ」

ハヤテは千桜に手を振る。その光景を泉は食い入るように隣で見ている。

「…ハヤ太君。ちーちゃんとなにかあったの？」

「え！？な、なぜ！？」

「なーんか最近妙に仲がいい気がして…」

千桜はナギと親しくなりよく屋敷でアニメやらゲームに興じる仲なのだがハヤテには誰にも言うなと口止めされているのだ。

「え…そう見えます？気のせいですよ。じゃあ僕たちも早いところ行きますか」

「う、うん」

なんだかはぐらかされた感が否めない泉はじーっとハヤテを見る。怪しまれているとわかりつつもハヤテは足早に時計塔へ向かう。

「それより瀬川さん。ヒナギクさんはなぜ怒っているんですか？」
「それがね、今日は生徒会今年最後の会議があったみたいで…それに私だけ来なかったみたいなんだ…」
「どうして行かなかったんです？」
「で、でも私知らなくて…。初耳だよ！こんなことがあるなんて…」
「そうだったんですか」
「どうしよ…！みんな怒ってるよね…」

今にも泣きそうになる泉。だがハヤテが安心させようと話を始めた。
「大丈夫ですよ。知らなかったのなら瀬川さんは悪くないですよ。ちゃんと事情を説明すればヒナギクさんだって許してくれるはずですよ」

「そうかなあ…」
「そうですね。まずは…謝りましょう。そうすればうまくいきます」
「どうして？」
「経験です」

そしてエレベーターの扉が開き最上階に到達。

「どんなに怖い人でも頭を下げれば大抵は…」
「誰が怖い人ですって？」
「へ！？」

なんとエレベーターを降りるとすぐにヒナギクがいたのだ。どうやらエレベーターに乗るために待っていたようである。もちろんハヤテの発言も逃さず聞いている。

「なんでハヤテ君がいるのかは置いといて…詳しく話を聞かせても

「らおうかしら…?」

「あ…これはヒナギクさんのことじゃなくて…!」

「誰も私だとは言っていないんですけど?」

「はう!!」

笑ってはいても内心穏やかでないのは目に見えている。

「…まあいいわ。泉も一緒ってことはハヤテ君が連れてきたの?」

「うん。どうしてわかったの?」

怯えるハヤテをよそに泉が答えた。

「わかるわよ。まだ電話して5分もしてないのにここに来るなんて常識じゃ考えられないもの」

「にはは…たしかに。あ…ヒナちゃんごめん…。サボったりして…」

「事情は後で聞いわ。とりあえず中で待ってて。中に美希も理沙もいるから」

そう言うとヒナギクはエレベーターに乗り下に向かった。ハヤテと泉は生徒会室に入るとヒナギクの言ったように美希と理沙がなにやらそわそわしていた。

「お!泉!…にハヤ太君?」

「美希ちゃん!理沙ちゃん!…どうしてここに?」

「どうしてって…今日は生徒会だから…」

「それをなんで二人は知ってたの?泉にはなんの連絡もこなかったのに…」

自分にだけ連絡が来てなかったことに泉はひどく落胆。すると理沙が事情を説明し始めた。

「すまない泉！実は昨日の夜に美希から連絡網が回ってきていたんだがつい眠くて朝には忘れていたんだ。泉に連絡を回すことを」

「ええ！？そんな～！…まあそれじゃあ仕方ないね」

理由を聞くなりあつさりと泉は理沙を許した。

（ヒナちゃんを怒らせたのはよくなかったけど…）

ちらつと横目でハヤテを見た。見られているハヤテはというと泉のことなど気にもかけずなにかの準備で装飾が施されつつ生徒会室をキョロキョロ見渡す。

「なんだかたくさん装飾がありますけどこれから何かあるんですか？」

「よくぞ聞いてくれたハヤ太君！実はこれからここで大晦日のパーティーがあるのだよ。せつかくの1年で最後の夜だ。朝まで飲めや歌えやの大騒ぎ！」

「まあ我々はノンアルコール飲料しか飲めないがな。ちよ～うどいい。泉も手伝ってくれ！」

「ラジャー」

三人娘は早速パーティーの準備に取りかかる。ハヤテはまた1人暇になってしまった。そんなハヤテを見て美希が言う。

「そうだ。ハヤ太君。せつかくだし君にも手伝ってもらおうか。なあ理沙」

「そうだな！ちよ～うど適役を探していたんだ！」

理沙のいう『適役』がなんなのか気になるも触れずにハヤテは話を

聞いた。

「ヒナをここに入れさせないよう時間稼ぎを頼む。どうせその様子じゃ暇なんだろう？」

「……………」

暇と見抜かれなにも言えない。あまり乗り気ではなかったが美希の話に乗ることに。

「時間稼ぎというത്？」

「パーティーの準備は内々に進めたい。ヒナはパーティーの存在を知らない。だから夜になったらここに呼んでびっくりさせようという魂胆なのだ！」

「それでヒナギクさんはどこに？」

「今、ヒナは用事とやらで職員室に行っている。これは渡りに船！ハヤ太君。ヒナが来てもここに入れさせないようにしてくれ」

「でも……」

「心配はするな。報酬は弾むぞ。なんなら前払いでも——」

美希はポケットから封筒を取り出した。だがハヤテはもらうつもりは毛頭ない。

「花菱さんからもらうつわけにはいきませんよ」

「なに。ほんの気持ちだ」

そう言うと美希は無理やりハヤテのポケットに封筒を入れた。ハヤテも場がこじれるといけないと思い一旦は受け取った。後でそれとなく返すつもりでいるが。そしてハヤテはヒナギクを足止めするべくエレベーターで下に向かった。そしてエレベーターが開いてすぐにまたまたヒナギクと鉢合わせに。

「わっ！！ヒナギクさん！？」

「…なんでそんなに驚くのよ。まるでお化けを見たみたいに…失礼ね」

「す、すみません…」

「それよりも帰るの？せっかくだし中でゆっくりしていけば？外、なんだか寒そうよ」

「あ…えつと…」

ヒナギクはエレベーターに乗ろうと足を踏み出す。だが今生徒会室に入られるわけにはいかないハヤテは後ろからヒナギクの腕をつかんだ。

「ヒナギクさん！！」

「えっ！？ちよつ…何！？」

いきなり掴まれた上に名前を呼ばれヒナギクは少し怯えた。ハヤテもなにか気の利いた言い訳を探すもなかなか見つからない。するとエレベーターの扉が閉まりかかる。これはいかんとハヤテはとりあえずヒナギクと一緒に外に出た。

「…ハヤテ…君？」

「あの…ヒナギクさん」

「は、はい…」

いつもとなにか様子の違うハヤテにヒナギクは困惑。そしてようやく言い訳が思い付いたハヤテは真顔でヒナギクに迫る。

「今から…一緒に遊びませんか？」

「へ！？今から！？私と！？」

「はい！１年で最後の日くらいパーティーといきましょう！パーティー！」

完全に泉の受け売りだがハヤテはビシツと決める。ヒナギクもヒナギクで断る理由はどこにも見当たらない。

「…いいわよ。ハヤテ君から誘ってくれたなら行くわよ。で、どこに行くの？」

「あ…それは…」

いざどこにと言われてもなかなか案は出ない。ヒナギクもそれを見抜き先に言う。

「じゃあ一回家に寄ってもいいかしら。いきなり言われてもなにも準備もしてないし着替えもしたいから」

「は、はい！」

なんとかその場をしのぐことができハヤテも一安心。二人は白皇学院を離れヒナギクの家に向かった。

ハヤテがヒナギクを遊びに誘った頃三千院家ではマリアがナギと話をしていた。ハヤテを勢いで追い出してしまったことについてだ。

「まったく…。ハヤテ君はナギの言うことを真に受けてしまいがちなのですからカツとなったとはいえ追い出すなんて…」

「わ、私は悪くないぞ！着替え中に入ってくるハヤテが悪いのだ！」

「休みだからといって昼過ぎまで寝ているからですよ。ハヤテ君だってナギはもうとつくに起きているものだと思ったでしょうし…」

「うぐ…！そ、それはそうとして私の着替えを見て無関心なのがまた腹がたつのだ！もうちょっと恥ずかしがるとかそういう…」

ナギの怒りはまだ収まらない。そんな中屋敷に携帯電話の着信音が響いた。

「あら…ナギ。携帯鳴ってますわよ」

「私じゃないぞ。マリアではないのか？」

「違いますわ。おかしいですね…。他に誰もいませんし…」

他にもKという執事がいたりいなかったりするのだが。

「もしかしてハヤテの携帯じゃないか？」

「ハヤテ君の？」

「マリア。戸棚の中を開けてくれ」

ナギに言われ戸棚を開けるとそこにはたしかにハヤテの携帯電話が。着信音もここから聞こえる。

「なぜハヤテ君の携帯電話がナギの部屋に？」

「いや、ハヤテが屋敷内で携帯電話を使わないように私が預かっているのだ。もし私以外の女と連絡を取り合ったりしないようにとか疑わしいメールをしていないかチェックできるしな」

「…束縛しすぎじゃありません？ハヤテ君だって他の誰かと話したい時だって…」

「ハヤテは私とだけ一緒にいればよいのだ…！」

「そのわりにはこうやって簡単に屋敷から追い出しますけど…」

「う…！それはそれとしてマリア。誰からの着信なのだ？」

話を逸らすように本題に移る。マリアが相手の名前を確認した。

「えっと…『西沢歩』とありますが…」

「ハムスターだと！？マリア。携帯貸してくれ」

「まあ本当はハヤテ君の物ですけど…」

「ハムスターめ…！ハヤテに何の用なのだ？」

ナギは携帯を受け取り一応電話に出た。

「あ！やつと繋がった！もしも…」

「おう。ハムスター。どうしたのだ？そんなに慌てて」

「…ナギちゃん？」

「そうだ。残念ながらハヤテはここにはおらん。じゃあな、ハム…」

「ちよつ！待った待った！ハヤテ君がいないならナギちゃんに話があるんだけど…」

「私に？なんだ？」

「しつかりとは見ていないんだけど…さっきたまたまハヤテ君とすれ違ったんだ」

「ハヤテが！？どこにだ！？」

ナギは是が非でもハヤテの居場所が知りたいのだ。出ていく原因を作ったのはナギ本人なのだが。

「えっと…今はどこにいるのかは知らないけど白皇学院の方向に行

つてたよ』

「本当か!？」

『そ、それよりさ!!ちゃんと見たわけじゃないからよくわからないけど...』

そう言った後歩はしばらく言葉に詰まる。耐えかねたナギは歩に言う。

「おい。どうした。言いたいことがあるなら早く言え。切るぞ」

『誘拐...』

「なに？」

『誘拐だよ!誘拐!!女の子を抱えてたんだよ!!見間違いかとは思っけど...』

「はあ...。本当にお前は...。ハヤテに限って誘拐などするわけじゃないか」

自信満々に告げるナギを隣でマリアが白い目で見ていた。

「話はそれだけか？」

『そう...だよ。ハヤテ君に限ってそんなことあるわけないよね』

「当たり前だ。そんじゃあなハムスター」

『あっ—』

何かを言う前にナギは電話を切った。

「誘拐なんかバカなことを考えるわけないだろう。な、マリア」
「え、ええ...」

マリアは曖昧な返事をする。

「ですけど…誘拐にないにせよハヤテ君のことですからなにかまた不幸なことに巻き込まれているのでは？」

「たしかにそれもあるな。マリア。悪いがハヤテを探してきてはくれないか？」

「許す気になったのですね？」

「べ、別に許してはいないぞ！！厄介ごとに巻き込まれているなら助けてやらないと…！私はハヤテの主なのだから！！」

「はいはい。では行つてきますね。間違つてもナギが誘拐されたりしないでくださいよ？」

「外に出なければ問題ない！SPがいるから何の心配もいらん！」

その言葉を聞くとマリアは屋敷を出た。一応屋敷を出る前にSPたちにはナギがどんな理由をつけようが外に出さないよう釘を打つてはいたが。

ハヤテはヒナギクの家に來ていた。正しくは上がり込んでいた、なのだが。さすがに寒い中外で待たせるのも悪いとヒナギクが中に案内したのだ。

「ごめんね。今ちよつと飲み物切らしてるからお茶でもいい？」

「あ、僕のことはお構いなく」

ヒナギクの準備ができるまでの間ハヤテはヒナギクの義母と話をしていた。いらないういっつもお茶を出された。

「もしかして綾崎君、これからヒナちゃんとデートかしら？」

「ゴフツッ！…ゲホツ…ち、違いますよ！たしかに遊びには行きますけどデートとかそういうことじゃないと思いますよ。少なくともヒナギクさんは…」

「そうかしら？ヒナちゃん、よく男の子からデートのお誘いがあるけどいっつも断ってるけど？でも綾崎君には…」

「はは…まさか」

「じゃあ綾崎君はヒナちゃんのこと…スキ？」

「ふあへ！？」

あまりに単刀直入な質問をされハヤテは戸惑う。しかもそれがヒナギクの義母であるならなおさらだ。執事らしく丁寧に答えた。

「…スキといふかなんというか…とっても可愛い娘さんですけど…」

「綾崎君にならあげてもいいわよ♪可愛い娘さんを♪」

「な、なにを急にー！！」

もうなにを言っても打ちのめされるハヤテ。ようやく準備ができたヒナギクがリビングにやって来た。なぜか顔が赤い。

「お、おまたせ！さ！遊びに行くんでしょ！？日が暮れないうちに早くー！」

「は、はい！ではお義母さま、おじゃましました！」

「ごゆっくりー」

ハヤテは逃げるように部屋を出た。ハヤテがいなくなった部屋ではヒナギクが怒った顔で義母に迫る。

「お義母さん？ハヤテ君になんてこと聞いてるのよ！！恥ずかしいじゃない！！」

「あ、聞こえてた？」

「しっかり聞こえたわよ！」

「だったら綾崎君の返事も聞いてー」

「…いつてきますっ！！」

ヒナギクは勢いよくドアを閉めた。もちろんハヤテの返事もしっかり聞こえていた。それもあつてかまともにハヤテに接することができない。玄関から出たところでハヤテが待っていたのだが睨んだままでもなにも言えずにいる。

「…どうしましたヒナギクさん？」

「う…！あ、あの…」

「あれ？ヒナギクさん、その靴…」

「え？」

ハヤテが指摘したのでヒナギクは自分の靴を見た。なぜかサンダルだったのだ。とんでもないことをしてしまいヒナギクはさらに焦る。急いで中に戻りちゃんとした靴に履き替えた。

「珍しいですね。ヒナギクさんがそんな間違いをするなんて」

「う…っ…！仕方ないでしょ！？人間誰しも間違いの1つや2つ…」

「それから…」

「何よ？」

またまたハヤテが靴を指差した。今度は靴紐がほどけていたのだ。

「さすがにほどけたままでは危ないですよ」

「…あ…えっと…ちゅ、忠告ありがとう！今結ぶわ！」

片膝立ちになり靴紐を結ぶ。だが落ち着かないのか中々結べない。
手が妙に震えているのだ。

（なんでこんなことすぐにできないのよ！！落ち着くのよヒナギク
！！ハヤテ君の前でこんな醜態は―）

自己暗示をかけてもできないものはできない。すると見かねたハヤ
テも片膝立ちになり靴紐に手を伸ばす。

「きつと寒さで手がかじかんでいるんですよ。僕がやりますから」

「で、でも…！！」

「大丈夫。こういうのはいつもお嬢さまにやっていますから慣れて
ます」

「そ、そう…」

言ったとおりハヤテはものの数秒で靴紐を結び終えた。

「はい、できましたよ」

「…お手数かけたわね！じゃあ行くわよ！！ハヤテ君！！」

「ええ」

「それより行く場所は決まったの？ちゃんと考えてあるわよね？」

「はい。年末はどこも混んでいるでしょうから空いているような場
所を優先して考えました！」

「へー。それは期待できるわね」

ハヤテはなるべく時間を稼げる場所を。ヒナギクはハヤテとなら場

所は選ばない。そんな思惑を胸に二人は歩き始めた。その様子を電信柱に隠れて見る1人のメイドの姿があった。

（あれってハヤテさんですよ？隣にいるのは…白皇学院の生徒会長さん！？）

二人をつけているのは貴嶋サキである。これから買い物に行くところだったのだが考え事をしていたため偶然ヒナギクの家の前を通りかかりそこでたまたま二人を見たのである。そして考え事というのは…

（まったく…！若ったら知らないうちにえええHな本なんか隠していたなんて…！）

サキは許可なくワタルの部屋の掃除をしていた際にその手の本を偶然発見してしまったのだ。もちろんまだワタル本人には問いただしていない。

（もし…もし若がこのまま不良少年になったらどうしましょう…！）

ワタルのことも気になるが今のサキにとってはハヤテとヒナギクが一緒だということも気になっていた。

（あの二人、もしかしていい仲なのでしょうか…？）

電信柱から電信柱に隠れ二人を尾行。さらにその尾行しているサキももう1人のメイドにつけられていた。

（…なぜサキさんがあんなことをしているのかしら？）

マリアである。SP部隊を巧みに使いハヤテの居場所を割り出したのだ。このままナギに知らせても良かったのだが二人がなにをしているのかも気になったためとりあえず尾行をしているのだ。

（ハヤテ君も隅におけませんね。屋敷を追い出されたと思ったらすぐに女の子とデートだなんて…）

今までハヤテが追い出されたことに同情していたマリアだがヒナギクと一緒にいると知ると白い目で見えるようになった。

ハヤテとヒナギクはとあるスポーツジムにやって来た。たしかに大晦日なので人影はまばらである。

「スポーツ…ジム？もしかして今から体を動かすの？」

「そのつもりですけど…」

ハヤテとしてはスポーツをしていれば勝手に時間が過ぎるだろうという計算なのだ。

「そういうことは最初に言ってよね。着替えてきた意味がないじゃ

ない」

「大丈夫ですよ。ここはスポーツウェアを貸してくれますから」

「やけに詳しいわね、ハヤテ君」

「実は昔ここで大人相手にインストラクターをやっていたんですね」

ヒナギクは考えた。昔といってもハヤテはまだ高校生。大人相手にインストラクターをやるなどかなりの技量が必要ではないかと。

「よ、よく務まったわね」

「体を動かすだけですからね。意外となんとかなるものですよ。さ、入りましょう」

中に入り二人はすぐにスポーツウェアを借りた。別々に着替えを済ますと二人は合流する。

「早いわねハヤテ君」

「そんなことないですよ。僕も今来ただけですし」

するとしばらくヒナギクはハヤテの姿を見つめたまま動かない。ハヤテは不思議に思って声をかける。

「あの…僕、なにか変ですか？」

「…えっ！？な、なんで!？」

「いや…じつと一点を見つめたままだったの…」

「そうだった？気のせいよ。気のせい」

その場をなんとか切り抜けたヒナギクだったが本当はハヤテの姿を見ていたと言えなかった。

（いつも執事服を着ているからかしら。なんだかハヤテ君がいつも感じが違うような…）

ポーツとしたままヒナギクは直立不動。これにはさすがにハヤテも変だと感じた。

「あのー…ヒナギクさ…」

「…あ！ー！ご、ごめん！またポーツとしちゃって…」

「い、いえ。じゃあ行きますか」

違和感を覚えながらヒナギクに接するハヤテだったがもしかするとなにか他の事を考えているのではと推測。そして結論が出た。

（やっぱりいきなり遊びに誘われて迷惑だったのかなあ…。なにか他に用事があったのかもしれないな…）

ヒナギクが上の空なのは自分といるのが嫌だからなのだと思うと途端に元気がなくなる。ヒナギクもハヤテの様子がちよつと変になったのを感じ取った。

（どうしたのかしら？…もしかして今ので私、変な子だと思われた…？）

ポーツとしてばかりの自分の行動でハヤテに変だと思われたとヒナギクは結論付ける。なんとかしなければと思い積極的に行動を始めた。

「なにしてるのよハヤテ君！ー時間は限られているのよ？いろんな施設があるみたいだし出来る限りやってくわよ！ー」

「わ、わかりました！」

強引にハヤテを連れていくヒナギク。ハヤテはいつもの強気なヒナギクに戻ったようなので一安心。そしてこの二人のやり取りもメイド二人組に影から見られていた。もちろんジム内なのでウェアに着替えている。

「なにをしているのかと思えばスポーツですか…。ハヤテ君は一体ヒナギクさんをどうしようというのでしょうか？」

「別に疚しい気持ちはないんじゃないですか？ハヤテさんのことですから…」

「いけません！サキさんはまだわからないと思いますがハヤテ君は驚異の天然ジゴロ！！ヒナギクさんをその気にさせるなんて造作もないことですわー！！」

「そうなんですか…？」

力強く言うマリアにサキは同意せざるを得ない。

（ハヤテさんってマリアさんにそんな風に思われていたんですか…）

ちよつとハヤテに同情するサキであつた。

一通り準備運動を済ませた二人はテニスコートにいた。ヒナギクの強い希望でここにきたのだ。

「なんでテニスなんですか？」

ハヤテは聞いた。いきなり乗り気になったと思えば選んだのはテニス。理由が気になった。

「そ、それは…えと…何でもいいでしょ！？だいたいここに来たのはハヤテ君なんだから文句言わない！！」

「は、はい。わかりました」

ヒナギクはなにかを隠すように怒鳴る。本当の理由はハヤテには言いたくないようだ。

（ハヤテ君とテニスをした夢を見たからだって…なんか恥ずかしいじゃない。夢にまでハヤテ君が出てきたなんて知られたくないし…）

理由はなんにせよ二人は試合を始めようとした。だが二人がいるテニスコートに新たに二人入ってきた。

「ちょっとお待ちなさい！よければ私たちと試合しません！？」

「そ、そうですよ！」

来たのは通りすがりのメイド×2だ。グラサンと声色を変えていたがハヤテは二人を見るや否や頬を赤くした。

（なんでマリアさんとサキさんがここに…！？もしかしてつけられたのか！？）

変装しているつもりだったがマリアとサキの存在はすぐにバレてしまっていた。しかしハヤテはそのことには触れないで話を続ける。

「…いいですよ。ね？ヒナギクさん」

「私は構わないわよ。4人ってことは…ダブルスでいいですか？」

ヒナギクは真顔で変装しているマリアに聞いた。どうやらヒナギクはまだ二人が変装していることを知らないようだ。

「え、ええ。いいですよ！さあ始めましょうか！」

そして互いにコート of 両端に立ち作戦を立てる。マリアとサキも作戦を立てるがその前にサキがどうしても聞きたいことがあった。

「マリアさん…なぜ私たちがテニスをしなければいけないんですか？」

「す、すみません…。ハヤテ君たちを見ていたらついやりたくなっ
てしまいました…！学生の頃はよく体育で楽しみましたから」

「そうですか…。私、テニスのことあんまり知らないんですけど…」

「大丈夫です♪私がサキさんの分までカバーしますから♪」

そしてハヤテとヒナギクはというと…

「とりあえず見た目は強そうだわ。いい？ここは様子見なんかしないで先行逃げ切りでいくわよ」

「わかりました！」

「とにかく負けるわけにはいかないわよ！ハヤテ君！」

「はいっ！！頑張りましょうヒナギクさん！！」

お互いに拳をぶつけ合い気合いを入れる。コートの反対側からマリ
アはその様子をじっと見ていた。

(…いいペアですね、あの二人。もしかして既にいい仲なのでしょう
か…?)

そしてコイントス。

「じゃあマリ…あなたはどちらを選びます？」

「そうですね…。では表で」

キンッ！

金属音と共にコインが高々と舞い上がる。ハヤテの手の甲に落ちた
コインはマリアの言った表だ。

「当たりですね。ではサーブは私たちからということでは…」

「はい。どうぞ」

ボールをマリアに渡すハヤテ。その際に周りには聞こえないよう小
さな声でハヤテはささやいた。

「…なぜマリアさんがここにいるんですか？」

「…え!？」

ただそれだけを言うとハヤテも位置についた。正体がバレていると
知るとさらにマリアの闘志に火がついた。

(そうですか…。ハヤテ君、相手が私とわかっていながら勝負を受
けるとは…!私も甘く見られたものですね。いいでしょう…。再起

不能になるまで叩きのめしてやります！！）

マリアは高々とトスを上げた。そして気合いの入ったボールがハヤテめがけて飛んでいく。

「ハヤテ君！」

「がはっ！！」

軌道がまったく見えないサーブがハヤテの腹に直撃。尻餅をつき腹を押さえる。

「だ、大丈夫！？ハヤテ君！！」

「ええ…。いきなりだったので反応が遅れてしまいました…。ヒナギクさんも気を付けてください。あの人、中々の使い手ですよ」

（参ったな…。あんなに本気でくるなんて…。マリアさんに勝てるのか…。！？）

ラケットを杖代わりにハヤテは立ち上がる。そして再びマリアのサーブ。レシーバーはヒナギクだ。またしてもものすごいサーブがヒナギクを襲う。

「はやっ！！」

声を出す間も無くボールはヒナギクの横を抜けていった。ヒナギクの目には黄色い線が横を掠めていったようにしか見えなかった。

「ヒナギクさん！！」

「ハヤテ君…作戦変更よ。あの子のサーブは諦めて他をキッチリ取るわよ！」

「…それしかないようですね」

その後マリアのサーブを二人は返そうともせずマリア・サキペア1ゲーム先取。

「さすがですね。マリアさん。ハヤテさんたち、まったく動けてませんよ」

サキはマリアの耳元でささやく。マリアもちょっと大人げなかったと反省する。

「実力の差を見せすぎましたね」。これでは面白くありませんから手を抜きましょうか」

次はハヤテのサーブ。

（あのサーブを返すのはたぶん無理だ。となればこっちのサーブは絶対に落とすわけには……！）

高々とトスを上げハヤテはサーブを打った。一直線にマリアに向かっていく。スピードもそれなりにある。だがマリアにとっては止まっているも同然だ。

「手を抜くとはいいましたがわざと負けるつもりはありませんわ！
！」

鋭いショットがサイドを襲う。しかしそこは前衛のヒナギクの守備範囲。簡単に追い付く。

「次はこっちの番よ！」

ヒナギクのショットはマリアの完全逆方向に。サキはまったく反応できない。

「決まったわ！」

「さすがヒナギクさー」

ようやく反撃開始かと思われた次の瞬間。

「そう簡単にはいきませんわー！」

ボールがスライスしマリアの元へ。ギリギリ追い付き今度こそヒナギクの横を抜けていった。

「な、なんで！？たしかに決まったはず…！」

ヒナギクはまだ信じられないような表情。そこでハヤテが冷静に分析する。

「おそらく回転をかけたんですよ。だからボールがスライスしてマ…あの人のとこに…」

「なるほどね…。これは一筋縄じゃないわ…。ハヤテ君…とにかく今は耐えるのよ！！」

「はい！速さなら僕も負けません！」

ハヤテは力強く言い切った。

しかしその10分後。ハヤテとヒナギクはスコアを見て愕然とする。

「5-2…！次取られたら私たちの負けだわ…！」

「はい…！でも…どこに打つても全部返されてしまいますよ」

わずかな隙間があればそこを狙うなどマリアにとっては造作もないことだ。ハヤテたちはサキのサーブでしか点を取れていない。次はヒナギクのサーブである。

「ハヤテ君。もう正攻法では勝てないことははっきりしたわ。なら…！っそこは奇策に出るわよ。ちょっと耳貸して」

「は、はい…」

二人は隅でこそそ話を始める。マリアとサキは余裕の表情だ。

「ここはお姉さんとしての貫禄を見せておかないといけませんからね」

「それにしてもマリアさん強すぎですね。死角なしですよ」

「…それがそうでもないんですよ。たった1つ、今の私ではどうにもならないことが…」

「え？」

ようやく作戦会議も終わり各々が位置についた。

「ハヤテ君……！頼むわよ」

「わかってますけど……本当にいいんですか？」

「これ以外に勝つ見込みはないわ！さあ行くわよ！」

ヒナギクはサーブを打つ。マリアはどんな作戦なのか警戒したが、
んの工夫もないただのサーブである。

「ついに諦めましたか……！」

「そうでもありませんよ……！」

なんとハヤテとヒナギク二人がネットについたのだ。これではさすがのマリアも打つ場所がないかと思われた。だが一ヶ所空いている場所を見つけた。

「残念ですね！まだ……ここにあります！」

マリアは瞬時の判断でロブを上げる。このままではボールは無人の後衛に落ちてしまう。だがヒナギクはそれを読んでいた。

「かかったわね！最初からそこに打つことくらいわかっていたわ！
！ハヤテ君……！」

「は、はい……！」

ハヤテは身を屈める。そしてハヤテの肩を借りヒナギクは大ジャンプ。ボールに届いた。

「はあああーっ……！」

ものすごいスマッシュがマリアを襲う。だがそれも追い付く。しかしそこまでだ。追い付いたがマリアにはスマッシュを返す力がな

ったのだ。ラケットが弾かれようやく反撃が始まった。

「思った通り…！スピードボールには強くてもパワーボールには対処できないみたいだわ。ハヤテ君！この作戦で一気に行くわよ！！」

「…ヒナギクさん。やっぱりこの作戦やめた方が…」

「どうして？」

「えっと…だから…」

ハヤテは顔を赤くする。いい加減ヒナギクがしびれを切らしてきた。

「早く言いなさいよ。怒らないから」

「じゃ…じゃあ。ヒナギクさんが飛ぶのは構いませんがスカートの中が下から丸見えです」

「…へ！？」

「いくらスパッツをはいているとはいえ淫らな行為はするべきでは…」

「よ、余計なお世話よ！！」

ヒナギクはラケットでハヤテの頭を叩く。ラケットは人を傷つけるためにあるではありません。あしからず。

「そんなこと言われると急にやりずらくなるじゃない！いいから勝つわよ！」

「ヒナギクさんがいいならなにも言いませんけど…」

その後破竹の勢いでポイントを奪っていくハヤテとヒナギク。ついに5-4。いよいよ1ゲーム差。マリアは二人の作戦を中々打ち破れない。

（なんてかあのコンビネーションを止めないことには勝ち目はない

ですわ…！ヒナギクさんが飛んだより高いロブを上げるしか…）

するとマリアはピンときた。

（…ヒナギクさん…高い…そ、そうですわ！）

ようやく光が射し込んだ。必勝対策は万全だ。ハヤテのサーブ。相変わらず普通のサーブだ。そしてハヤテも前衛に上がった。マリアは高々とロブを打つ。ここまではさっきと同じだ。

「任せてハヤテ君！」

ヒナギクはハヤテの肩を借り大ジャンプ。その瞬間マリアがヒナギクに言う。

「そう言えばそんな高く飛んで大丈夫ですか！？下見たらどうなるか…！」

「な、なによ急に…！」

言葉に惑わされ一瞬ヒナギクは下を見てしまった。あまり高くはなかったが高所恐怖症のヒナギクにとっては死んでしまうほどの高さに見えた。バランスを崩し下に落ちる。

「キヤアア…！」

「ヒナギクさんっ…！」

間一髪ハヤテがスライディングでヒナギクを抱える。ヒナギクは涙目だ。

「あ…ありがとうハヤテ君…！だけど…もう私、飛べないわ…！」

「…いいですよ。僕たちはよく頑張りましたよ。でも最後まで全力でやりましょう!」

「そうね…。今回は相手が一枚上手だったってことね…」

その後は完全に流れはマリアのほうに戻ってしまい結果は6 - 4。
だが破れた二人は清々しい笑顔だ。

「やっぱり体を動かすとスカツとするわね。…あら?あの二人、もういない…」

「き、きつとなにか用事があつたんですよ!」

「すぐくつまかったけど…プロ選手かしら?」

「さあ…でも結構身近にいたりして…」

「?」

最後までヒナギクはマリアとサキだと見抜くことはできなかった。
ちなみに二人はこれ以上いると正体がバレるのではと危惧し足早に立ち去ったのだ。

「あ、でもどうしてあの人私が高所恐怖症だって知ってたのかしら…?」

「え!?!た、たまたまですよきつと!」

「そうかしら…?」

その後しばらくはなんだか腑に落ちない表情のヒナギクから疑いを晴らすのでハヤテは必死だったようだ。

テニスを終えた二人はベンチに座り休憩していた。さすがに1セットとは言え相手が相手だけに疲労感是否めなかったようだ。

「ハヤテ君、なにか飲む？」

「僕は別に…」

「遠慮しないの。今買ってくるわね」

ヒナギクはベンチから立ち上がり自販機へと向かう。一人になったハヤテは表情を歪め右肩を気にしていた。

（やっぱり痛むな…。だけどヒナギクさんに知られるわけには…）

散々土台にされたハヤテの肩は打撲に近い症状になっていたのだ。しかしそれをヒナギクに悟られるわけにはいかない。知られればヒナギクは必ず自分を責めるだろうと考えたからだ。ヒナギクがジュースを両手に持ち戻ってくるとハヤテは平然とした表情に戻った。

「はい、ハヤテ君」

「あ…どうも」

ハヤテは無意識に右手を伸ばす。しかしこれが失敗だったのだ。ジュースを持った瞬間右肩に痛みが走りジュースを落としてしまった。

「す、すみません。ちょっとぼんやりしてて…」

「ハヤテ君…。もしかして…」

いくらぼんやりしててもこんなことにはならないと思いヒナギクはハヤテの右肩を触る。すると一瞬ハヤテの顔が歪んだのが見えたのだ。

「ハヤテ君。右肩…痛いのか？」

「あつと…」

「隠しても無駄よ」

さすがにハヤテも観念したようで右肩のことを打ち明けた。ヒナギクの表情が曇る。

「…ごめんハヤテ君。私、勝つことだけに夢中でハヤテ君のこと全然考えてなくて…」

「いいんですよ。あれしか方法がなかったんですから。それに…」

一瞬間を置きハヤテが言う。

「どんな勝負にも妥協せず全力で向かうヒナギクさんは僕は素敵だと思いますよ」

「ハヤテ君…」

心配させまいと笑顔でハヤテは言う。ヒナギクがときめいてしまったことなど知らずに。

「そ、そう言ってもらえると私も楽だわ！」

「僕のことは気にしないでください。一晩すれば治りますから」

「でも…その肩じゃ今日はもうスポーツはやらないほうがいいわよ」

「はい。…でももう外が暗くなってきましたから行きましょるか」「そうね」

二人は別々に更衣室へと向かった。ヒナギクは着替えている間ずっと緩みっぱなしだった。

（楽しかった…！そう言えばハヤテ君、こんな遅くまで私と遊んでても平気なのかしら？）

ヒナギクは時間を確認するため携帯電話を見た。時刻は5時過ぎ。そしてメールが一件入っていた。

『白皇の生徒会室で待ってます。一年で最後の夜くらいみんなで過ごさない？』

花菱美希』

メールを見終えるとヒナギクはパチツと勢いよく携帯電話を閉じる。そしてなにかを決めたように更衣室を出た。ハヤテはと言うとロッカーを開け執事服を取ろうとした際になにかを発見した。

（あれ…？これは…）

ハヤテは驚いた。なんと自分の携帯電話が置いてあったのだ。さらに置き手紙まであった。

『ハヤテ君。そろそろお屋敷に帰ってきたらどうですか？ナギも心配していますよ』

マリア』

ハヤテはさらに驚いた。

（マリアさん…即興で鍵を開けられるだなんて…）

寒さとは違う身震いがした。とりあえずナギが許してくれる気にな
っているのを知ると安心したようだ。着替えを済ませたハヤテは更
衣室を出た。既にヒナギクが待っていた。

「お待たせしました。ヒナギクさん」

「ううん。私も今来たところよ。それより…ハヤテ君はこれからど
うするの？」

ヒナギクに聞かれたハヤテは時間を稼げたので屋敷に帰る気満々だ
った。

「もう屋敷に帰ろうかと…。ヒナギクさんはこれからパーティーで
すよね？」

ぼろっとパーティーのことを口にしてしまったハヤテは言った直後
にハッとした。

「…なんでハヤテ君がそのことを知ってるの？」

「あ…いや…」

「泉を連れてきたことにも関係してるのかしら？」

度重なる質問攻めにハヤテも折れて事情を全てしゃべった。

「…つまり屋敷を追い出されて仕方なく私といたと…」

「そういうわけでは…」

「だって美希に言われて時間稼ぎをしたんでしょ？」

半ば自棄になりながらヒナギクはハヤテに聞いた。しばらくハヤテ
は黙ったままだったが意を決して声を出す。

「…たしかにそう言われました。ヒナギクさんがこないようにと。でもこれだけは言わせてください！」

「な…なに？」

「僕は…仕方なくヒナギクさんといったわけじゃありません。断ろうと思えば断れました」

「じゃあどうして…？もしかして…」

ヒナギクは思った。万に一つ理由があるなら…

（もしかして…私のこと、好きになってくれたのかしら…！？え…！？どうしよう…！！）

告白されたらどう答えたらいいかただそれだけを考える。

「僕がヒナギクさんを誘ったのは…」

「…うん」

「夢を見たんです。ヒナギクさんの」

「ゆ、夢…？」

「はい。白昼夢だったのかもしれませんがいつの日かヒナギクさんとテニスをする夢を。だから…実際にヒナギクさんとテニスをやりたいなあ…。だからヒナギクさんがテニスをやると言った時はちよつと驚いてしまつて」

ハヤテは信じてもらえないだろうなと半ば諦め気味に話したがそれを聞くとヒナギクもクスクスと笑いだした。

「あはは。…そうだったの」

「やっぱり…おかしいですね」

「違うわよ。私も見たの。ハヤテ君と一緒にの夢を…」

「ヒナギクさんですか？偶然ですね」

「本当に。で、どうだった？実際にやってみて」

「楽しかったです。今年1年いろいろありましたけど一番楽しかったかもしれません。ヒナギクさんはどうでした？」

「私？私は…」

ヒナギクも今年1年あったことを思い出す。そして改めて気付いた。いつも心のどこかに一番好きな人がいたことを。

「私は…ハヤテ君という時が一番楽しかったかな…」

偽らざる本心をハヤテに言う。聞いた当人は照れていた。

「…ヒナギクさん。ありがとうございます。そう言ってもらえて嬉しいですよ」

「…い、言っとくけど他の誰にも言ったらダメよ！！ハヤテ君にだから言うのであって…他言したら許さないわよ！！」

「わかってますよ…じゃあ行きましょう。せつかくですから学校まで送って行きましょうか？」

気遣われてヒナギクは嬉しかったが今回は遠慮しようと首を横に振る。

「私は大丈夫。それより…早く帰らないとナギやマリアさんが心配してるんじゃない？」

「でも…もう暗いですよ」

「危なくなったら大声で叫ぶから安心して」

「…安心していいのかわかりません」

「いいの。それに…たぶんナギも勢いで出ていけって言ったと思うから今頃ハヤテ君が帰ってこなくて心細くなってるんじゃない？あ

の子、ああ見えて寂しがり屋だし」

「…わかりました。じゃあ今日はこれで。ヒナギクさん、さようなら」

「またね、ハヤテ君」

ハヤテは屋敷の方向へと走り出す。がすぐにヒナギクに止められた。

「ハヤテ君！」

「はい？」

「…よいお年を」

「…はい。ヒナギクさんもよいお年を」

二人は手を振りその場で別れた。

バタバタした感じの1日が終わった。ハヤテは屋敷に帰ってきていた。チラチラと雪も降ってきて寒さもさらに増す。

「ハ、ハヤテエー！」

「…お嬢さま？」

玄関を目指していると前からナギが走ってやってきた。ハヤテも走ってナギの元へ向かう。二人の距離が縮まりナギがハヤテに飛び付いた。

「寒かっただろ？ハヤテ。すまん…出ていけなんて言ったりしてしまつて…」

「僕こそすみません。お嬢さまの気持ちを察することができなくて…」

「いいんだ。それより早く！マリアがおいしいごはんを作って待ってるぞ！」

「はい！それより…コート一枚では寒くありませんか？」

そう言うとハヤテは上着を脱ぎナギにかけた。頭にもわずかに雪が積もっていたのを振り払う。

「さ、行きましょう」

「…うむ！」

中に入りマリアが食事を用意していた部屋に入った。既に食事は用意されていてマリアもいた。食事はナギの希望でそんなに盛大には行わない。

「あら。おかえりなさいハヤテ君。も。どこに行ってたんですか？心配しましたよ」

「えっ…」

どうやらマリアはハヤテがヒナギクといったことを伏せているようだ。もちろんナギにも言っていない。

「寒かったでしょ？先にお風呂にでも入ってきたらどうですか？」

「そうしろハヤテ。ゆつくり暖まったらパーティーだ!!」
「お嬢さま。わかりました。では…」

ハヤテは二人に言われ大浴場へと向かった。今日の疲れを全部洗い流すように長々と風呂に入っただった。

白皇学院に着いたヒナギクは時計塔の最上階を下から見上げた。ハヤテの言ったとおり三人娘がパーティーの準備をしているのか光が灯っている。ヒナギクはびつくりさせようという狙いは読めていた。だからこそ反応に困った。

（もうパーティーのことはハヤテ君から聞いちゃったし…きっと私を驚かそうと用意してるわよね）

エレベーターに乗り最上階を目指す。そして一つヒナギクは決した。

（ここはみんなをがっかりさせないようにオーバーリアクションをするしかないわ!! ありきたりな反応をするわけにはいかない!! 桂ヒナギク!! 一世一代の大勝負!!）

最上階に到着。おそろおそろ扉を開ける。するとパーンと音が鳴る。クラッカーだ。そして予想どおり三人娘が待っていたのだ。

「……待ってました！！我らが生徒会長っ！！」

「わ、わあすごい！！みんなして用意してくれたの！？本当にありがとう！！」

三人の顔を見るや否や喜びを爆発させるヒナギク。だが逆にそれが不自然だったようで美希はがっかりした。

「はあ……ハヤ太君、言っちゃったのか……」

「へ？美希？」

「いくらなんでもクラッカーが鳴っただけじゃ普通喜ばない。事前に知っていたんだろ？」

「う……うん。でも嬉しいのはたしかよ！」

「……まあいい。よし！ヒナも来たことだし朝まで騒ぐぞ！！」

美希はワインの準備を始めた。もちろん未成年なのでノンアルコール。

「ささ！生徒会長さん！どうぞ！」

「あら。文もいたの？」

「ふあい！！一応文もシャルナちゃんも準備に加わったのでパーティーに参加させていただいたのです！ささ！今日は飲みますよ！！」

文はグラスいっぱいワインを注ぐ。ここはやはり飲み慣れている感じがする。

「シャルナちゃんは……ワインいらねえですね。どうせカレーしか飲めないでしょ？カレーにカレーをかけるほどのカレー好き……」

「インドをバカにするのも大概にしないで。文ちゃん？カレー色に染めるわよ」

「す、すみません…シャルナちゃん！」

「ちよつとーっ！！文ちゃんもシャルナちゃんも落ち着いてよぉ！」

なんとか泉が間に入り場は落ち着いた。そして理沙がヒナギクに言う。

「では早速生徒会長のヒナに乾杯の挨拶を！」

「えっ！？わ、私！？…ごほん。えつと…今年1年本当にお疲れ様

！…じゃあ…乾杯っ！！」

『乾杯ーっ！！』

もうここからは飲めや歌えやの大騒ぎ。どうにも手に負えなくなっていました。そしてさらに騒がしくなる要因が。

「ちよつと！！なに楽しそうにやってるのよ！パーティーがあるなら私を呼びなさい！」

「お姉ちゃん！？なんでここに！？」

「ひっく！宿直室で飲んでたらあんなたちの声が聞こえたから飛んできたのよ！うまそうなもんまで食べちゃって…！私も仲間に加わるわー！」

「どうぞどうぞ桂ちゃん♪」

「まったく…どうなっても知らないわよ」

雪路も加わりさらに騒がしさが増した。ヒナギクはうるさい部屋の中を避けバルコニーに出る。

（寒い…。雪…降ってる）

空を見上げると雪がチラチラと降っていた。闇夜に降る雪を見てヒナギクは心を和ませた。

（ハヤテ君やナギもこの雪を見てるのかな…）

1人しんみりしていると隣に美希もやって来た。

「どうした。1人で外に出て…」

「べ、別にたいしたことないわよ。もう中に入るし」

「ハヤ太君とはなにかあったか？」

「えっ？…いや…別に」

「まあ別に詮索するつもりはないわ。私はてっきり高所恐怖症が治ったのかと…」

「高所…恐怖症…」

ヒナギクの和んだ空気は一変する。バルコニーから下を見れば地上まで200数十メートル。クラクラしてきたのですぐ部屋に退散する。美希は情けなくふらつくヒナギクを見ている。

（なんで高所恐怖症なのにバルコニーに出たんだ…？もしかして忘れてた？）

到底理解しがたい行動を目の当たりにし美希も悩んだ。それから朝になるまでヒナギクは部屋から出ることはなくみんなと騒いだのだ。いろんなことを吹き飛ばすかのよう。

夜から降りだした雪はその日のうちに積もった。風呂上がりのハヤテも廊下の窓から外を見ていた。しばらくすると待ちかねたナギがハヤテの様子をうかがいにきた。

「おいハヤテ。そんなところで何をしてるのだ？」

「あ、お嬢さま」

「お前の風呂は長いな」

「そうですか？」

「…お、雪か」

ナギも窓から外を見た。

「この様子じゃ結構積もるな…。ハヤテ！そしたら明日は雪合戦だな！！」

「え！？本当ですか！？」

「せっかく雪が降ったのだ！！活用しない手はないぞ！」

「はい！やりましょう！お嬢さま！！」

ハヤテは感激した。ナギが自主的に外に出て遊ぶと言ったからだ。だがそれもその場かぎり。結局翌朝寒さを理由にナギは一步も外には出なかったのだった。

END

（後書き）

タイトルのモチーフ（要はパクリ）は「新撰組！土方歳三最期の1日」から取りました。あちらは「最期」これは「最後」ニュアンスの違いです。「最後」なら死ぬこともあるまいと。死がテーマだと思った方、予想を覆してしまいすみません…

今さら12月31日かよ！というツツコミは置いてください。ひな祭りネタだともっと急展開が必要だと思いなにかが起こりそうで起こらない大晦日をチョイス。大晦日だよ！ドラ。もんスペシャル！みたいな。

いつもの如く自己採点。…100点満点なんかじゃない！のは確かです。…17点で。最大の失敗は…音ですね。あんまり音をそのまま書くのは本意ではないのです。よく伝わらないし。…てかこれはデートだったんだろうか…。やはり恋愛は奥が深いというか私の場合スタートラインにも立てちゃいません。

では読んでくださった方々、ありがとうございました。言いたいことはたくさんあるでしょう（主に批判）。まあ…大目に見てください。私の顔にめんど…見えねーっていうツツコミはわかってます。顔ってあれだね。本当の顔じゃなくて顔が利くとかいう顔のほうで…あーれ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1121k/>

ハヤテのごとく！最後の1日

2010年10月9日17時41分発行